

創造・参加・実践
No.628

最新のJR西労組運動をチェックしよう!

JR西労組HP (http://www.jrw-union.gr.jp)



ダイレクトニュース(メール)



JR西労組 LINE



西日本旅客鉄道労働組合

〒530-0012 大阪市北区芝田2丁目1番18号

西 阪 急 ビ ル 9 階

TEL:06-6375-9869代 JR071-7155代

(FAX)06-6373-4133 JR071-7151

発行責任者 荻山 市朗

編集責任者 宮野 勇馬

JR西労組を代表して挨拶する荻山委員長



安部教授(関西大学)による基調講演

「事故を決して忘れず、安全を誓う集い」開催

福知山線列車事故から14年

働く者の全員参加で 職場から安全を確立しよう

2019年4月25日、JR西労組はTRPガーデンシティ大阪リバーサイドホテルに於いて、「事故を決して忘れず、安全を誓う集い」を開催した。会場には、JR連合加盟単組およびJR西日本連合のグループ労組の代表者を含めた約300名が集まり、改めて安全確立に向けて取り組みを強く認識しあつた。

2005年4月25日に発生したJR福知山線列車事故から14年が経過した。JR西労組はこの間、事故に対する反省と教訓を胸に刻み、安全確立を最優先課題に位置付け、運動を展開してきた。

しかしながら、2017年12月には新幹線重大インシデントが発生させ、未だ気がえないうりリスクがあり、より安全への感度を高める必要性を痛感した。また、事故後に入社した組合員もすでに5割弱となつており、二度と悲劇を繰り返さないために、事故を知らない世代に事故の悲惨さと教訓を伝えていくことの重要性も年々高まっている。

こうした認識にもとづき、JR西労組は安全確立にむけた決意を確認する場として、今年も4月25日に「事故を決して忘れず、安全を誓う集い」を開催した。

冒頭、出席者全員で黙祷を捧げ、主催者を代表して荻山中央執行委員長挨拶、続いて来賓のJR連合松岡会長の挨拶の後、昨年の9月から10月にかけて、賃金実態調査とともに実施した「安全の取り組みに対する意識に関する調査」の結果について、宮野政策調査部長から報告があつた。

安全に対する意識は引き続き高いレベルにあり、特に新幹線職場においては、重大インシデント以降の取り組みにより、高い安全意識が醸成されていることが報告された。(※アンケート結果の詳細は、JR西労組ニュースNo.530を参照)

その後、「JR西労組安全提言の振り返り」と今後の取り組み」と題して、福本業務部長より報告を受けた。2015年に策定した「JR西労組安全提言」の内容は、ヒューマンエラー非懲戒やルールの見直しなど、様々な施策に反映されていることや、会社が定めた「安全考動計画2017」「JR西日本グループ鉄道安全考動計画2022」にも大きく反映され、計画の実行性を高めることができたことと報告があつた。

一方で、今もなお、死亡労災や重大労災をはじめ、危険な事象が多発していること

や、役員世代交代がすす

み、職場での理解・浸透に大きな課題が残っていることなどにも言及があり、今後の取り組みとして、「鉄道安全考動計画2022」の検証と実践、チェック提言機能の磨き、グループ労組と連携した取り組みを継続して忘れない取り組みを継続するとともに、「JR西労組安全提言」の改訂を行う必要性を提起した。

その後、関西大学社会安全学教授の安部誠治氏から、「JR西日本の安全性向上の課題」と題する特別講演を受けた。

講演では、JR西日本は福知山線列車事故を契機に、労組からの提言もあり、「ヒューマンエラー」は結果であつて、原因ではない

今年も全国各地において、メーデーが開催された。連合大阪主催のメーデーは、4月27日に大阪城公園太陽の広場において開催され、中央本部の役員職員も参加した。当日は暑い日差しの中、大阪地本、本社総支部、西バス地本など、大阪地区に籍を置くJR西労組組合員や家族も数多く参加し、全体では3万2000人(連合大阪発表)が集結した。

中央大会にも多くの組合員が参加



中央大会にも多くの組合員が参加

【メーデーとは】

1886年にアメリカの労働者が「8時間労働」を要求してゼネラルストライキを起こしたことが起源。当時のスローガンは「第1の8時間は労働のために、第2の8時間は休息のために、そして最後の8時間はわたしの好きなことのために」というもの。かつて労働者の労働時間は12~14時間が当たり前であった。このゼネラルストライキは、8時間労働がなかなか実現しない中で、その後5月1日に行われ、1890年には世界の労働組合に波及、第1回の国際メーデーが実施された。

このことは、未だ弱点が残っていたこと、表れであり、組織的な課題を含め、いま一度、原点に立ち返って取り組みを進める必要がある、との指摘を受けた。

終了後、第7回新幹線問題対策会議が開催され、安部教授にも出席して頂いた。出席者からは、現場を代表する声や報告され、改善されたものもある一方で、長期的視点に立った検討が不十分であることや、車両や人員など、様々な面で余裕が不足している現状が報告された。

今後、設備や職場環境にかかわる要求を集約し、代表者会議を経て、改善要求につなげていく方針が確認された。

集会の最後には、新倉青年女性委員長によつて「集会アピール」が読み上げられ、全会一致で採択された。

●終了後、新幹線問題対策会議を開催

終了後、第7回新幹線問題対策会議が開催され、安部教授にも出席して頂いた。

出席者からは、現場を代表する声や報告され、改善されたものもある一方で、長期的視点に立った検討が不十分であることや、車両や人員など、様々な面で余裕が不足している現状が報告された。

荻山中央執行委員長 主催者代表挨拶【要旨】

2005年4月25日の福知山線列車事故の惨事から本日で14年が経過しました。事故で無念にも尊い命を失われた107名の御霊のご冥福をお祈りするとともに、お身体や心に大きな傷を負われ、今なお苦しんでおられる皆様の日も早いご快癒を心よりお祈り申し上げます。

昨年、私はご遺族の方々などで構成される「4.25ネットワーク」が主催する「追悼と安全のつどい」に初めてJR西労組を代表して出席しました。大切な家族を事故で奪われた立場にも関わらず、JR西日本を安全な会社に生まれ変わらせたという思いで真摯に取り組んでおられる姿勢に接し、本当に胸が打たれ、思いを新たにしました。「つどい」の後、ご遺族の方と懇談する機会があり、そこで「あなた方労働組合は事故が起きるまで何をしていたのか、事故を防げなかったのか」と問われましたが、あのような事故を惹き起こした当事者として、何の弁明もできませんでした。悲劇を絶対に繰り返してはならない、そのために働く側から安全確立のために役割を全力で果たさなければならぬと痛感しました。

現在、事故後に入社した組合員が1万3千人を超えて全体の半数に近づきつつあり、世代交代が年々進み中、事故を風化させず、日々の業務に活かす取り組みがますます重要になっています。ひとたび事故を起せば、取り返しのつかない悲劇を生んでしまうという厳然たる事実を決して忘れてはなりません。ご遺族、ご被害者の皆様の気持ちに思いを馳せ、安全の確立を運動の最優先課題に位置付け、事故の反省と教訓を胸に刻み、二度と悲劇を繰り返さないために、職場から不断に取り組み決意をあらためて固めたいと思います。

グループを含めたすべての組合員の皆さんは、事故の反省と教訓を胸に刻み、安全最優先で日々仕事に当たっておられます。しかし、昨年4月にJR西労組からの提言も反映し、労使の真摯な協議を通じて策定した「JR西日本グループ鉄道安全考動計画2022」がスタートした初年度に、墜落、感電、交通事故による4件の協力会社社員の痛ましい死亡労災を発生させてしまいました。労働災害のほか、注意事象や部内原因の輸送障害も増加傾向にあります。

昨年度から発生しているいずれの事象も、ルール違反や確認ミスが原因であり、それらの徹底が必要であることは言うまでもありませんが、その背景や原因に踏み込んで、現場で確実に守られる有効な対策を講じていかなければなりません。ルールや基本動作が守られていない理由に焦点を当て、ルールを不断に改善すること、そして、作業者がルールの必要性を理解し納得できる環境を築くことが求められます。

また、JR西労組の提言により新計画に反映し、「確認ですが…」を合言葉に取り組みに着手した確認し合う風土づくりについても、お互い認識が違いながら「相手も自分と同じようにわかっているだろう」という思い込みで、形だけのやり取りになってしまっている実態があり、確認会話の実効性を高めることも重要な課題です。

安部先生が座長を務める「新幹線重大インシデントに係る有識者会議」の報告書では、JR西日本に対して「先駆的、有益な取り組みをしているが、その後の施策展開や検証にはあまり注力しない組織風土が払拭できていない」「せっかく立派な対策や計画を定めても、PDCAサイクルの中でそれが回っていかず、いつのまにか忘れ去られていく」といった弱点が厳しく指摘されています。これは、現場の実態や課題を的確に把握しチェック・提言機能を強みとする私たちJR西労組が積極的に担うべき役割であることを自覚し、参加型、ボトムアップ型の取り組みを強化しなければなりません。

今も危険な事象が発生している実態を重く受け止め、JR西日本の安全に対するご遺族の皆様、ご被害者の皆様、社会の理解や信頼を得られるよう、あらためて福知山線列車事故の反省と教訓を胸に刻み、職場からの安全の確立に不断に取り組みすることを組織全体で誓い合い、主催者を代表してのご挨拶とします。